民主島根
2024年
3.10
第1444号
発行所　松江市袖師町３－６　TEL 0852－24－2444
日本共産党島根県委員会　FAX　0852－24－6369

# 現行の避難計画に実効性はない
# 島根原発２号機再稼働とめよう
## 松江　集会に350人、党議員らも参加

中国電力が今年８月の再稼働をめざしている島根原発２号機を巡り、再稼働を止める集会（同実行委主催）が３日、松江テルサホールで開かれました。約３５０人が参加し、集会後は会場周辺をデモ行進しました。

同実行委の岡崎由美子代表（弁護士）は、あいさつで「島根原発も半島にある。能登半島地震を踏まえれば、２号機の再稼働は許してはならない」と強調しました。

大河陽子弁護士が「原発震災！『避難計画』は住民を守らない」と題して講演。大河氏は避難行動要支援者の支援者不足やバス運転手が確保できない問題などを挙げ、「避難計画は実現可能なものではなく福島原発事故の被害を繰り返すものになる」と訴えました。

松江生協病院の眞木高之院長ら４氏が医療や避難の困難性についてスピーチしました。

集会では、島根・鳥取両県知事に対し、２号機再稼働同意を撤回し、島根原発の安全性と避難計画の実効性の再検証を求めるアピールを採択。日本共産党の、むらほえりこ衆院島根１区予定候補、亀谷ゆう子同２区予定候補、地方議員らが参加しました。

「再稼働ちょっと待った」とアピールする地方議員ら（松江市）

## 尾村県議の一般質問
### ■２号機再稼働同意の撤回を
### ＝２月県議会の論戦から＝

日本共産党の尾村利成県議は２月２８日に一般質問に立ちました。大国陽介県議は１日に一般質問を行い、知事や執行部を質しました。（続きは次号）

尾村県議は、能登半島地震は地震・津波などの自然災害と原発事故が同時に起きる原発震災（複合災害）時の避難が難しいことを実証したと強調し、丸山達也知事に半島と原発を抱える島根県として問題を直視し「島根原発２号機の再稼働同意の撤回」を迫りました。

尾村氏は①能登半島では避難ルートが通行不能となり、住家被害が７万棟を超え、屋内退避ができない事態となった②断層の評価や連動の可能性等について科学的な検討の必要性を明確にし、大規模な地割れや地盤の変位・隆起・沈降が起きた場合に原発に何が起こるか保証できない―ことを明らかにしたと指摘し、島根原発の安全性を判断するために隆起のメカニズムの徹底解明を要求。

「今回の地震を受け、県民の不安はさらに高まり、不安を抱いている県民の声をより丁寧に聞き、避難計画の実効性を再検証すべき」と強く求めました。

丸山知事は「島根半島で同様の地震が発生した場合を想定した地震災害への備えを強化し、複合災害時の対応力を強化する」と述べるも、避難計画の実効性を再検証する考えは示しませんでした。

これに対し、尾村氏は再質問で「原発直下を走る宍道断層（３９キロ）の近傍に１２３６カ所もの土砂災害危険箇所がある。活断層上の公共建築物の耐震化も重要であり、様々な課題を洗い直すべき」とし、「県民合意のない島根原発２号機再稼働は認められない」と強調しました。

## 大国県議の一般質問
### ■生活困窮者に寄り添う支援体制を

大国県議は、実質賃金や年金が目減りしているもとで、生活困窮者自立支援制度などの各種行政サービスが十分に利用できていない実態を取り上げました。

大国氏は、出雲市で国民健康保険料を払えない方に対して、担当者が本人の意に沿わない納付約束をさせ、相談に行っても支払金額の減額は拒否した挙句、「話を聞くつもりは最初からない。事情を百万回言われても全く響かない」と言い放つなどの冷酷な事態を告発し厳しく批判。「直ちに改善されるべき」と訴えるとともに、税や保険料の滞納解消と生活の立て直し支援は「行政が十分に連携し包括的に対応することが欠かせない。部署間の連携強化など改善が必要」と指摘しました。

安食治外健康福祉部長は「滞納理由が経済的困窮であると把握した場合は、税務、福祉などの担当課が連携して対応することなどを市町村へ通知してきた。指摘のような状況があるとすれば、今後も継続して伝えていく必要がある」と答弁。その上で「来年度から自立相談支援機関の職員研修で事例検討や情報提供を行い、対応を確認していきたい」と述べ、「関係機関の間で支援が必要な方の情報や支援内容の共有が図られる体制の整備を働きかけていく」と答えました。

## 鼓動

寒の戻りを肌で感じる日に、本稿を執筆している。そして、同じ寒さでも、三月の声を聞いた中では、それに対する思いもこれまでとは幾分違ったものになっていることも実感している。こうして季節は巡っていく▼さて、この「季節」、自然界に限定されているものかと言えば、そうではない。「政治の春」あるいは「冬の時代」などと表現されるように、時代を「季節」になぞらえて呼ぶことがある▼たとえば日本共産党にとっての１９６０年代～７０年代は、綱領改定後の「第一の躍進」、いわば「春」の時代だった。この時代は、「政治の季節」と呼ばれてもいるように、「政治を語り、組織の一員として運動をする」人々の、熱気に満ちた季節としても記憶されている▼では、今の時代はどうだろう。日本共産党は、新しい政治を生み出す〝夜明け前〟まさに「春」を迎える歴史的な時期と見ている。筆者は、政治が生活に直結することを実感したが故に、「今の政治を変えたい」と声を上げる決意をした。「生活を良くしたい」との願いで一致し、大きな力を作れる条件が整った時代を生きている確信もある▼こんなことを考えている折、仏の詩人アンドレ・ブルトンの残した言葉の中に、自身が勇気づけられる一節を見つけた。『世界を変える』とマルクスは言った。『生活を変える』とランボーは言った。この二つのスローガンは我々にとっては一つのものだ」と。つまり、世の中を変える「革命」の種は日々の生活の内にあり、そこにその出発点もあるのだ。島根ではこの春、熱い政治戦がたたかわれる。社会の春を皆の力で創りたい。（江）